



受け継がれる^{おも}想い

兵庫県・雲雀丘学園高等学校 2年 橋本 有加

現在高校2年の私の家系は現在までのところ三代続けて金融関連の仕事に就いている。曾祖父は銀行員、祖父は保険、そして父も保険業界だ。だれも申し合わせたこともなく、それでも約百年に渡り三人は日本の金融と共に生きてきた。今回「日本の金融と経済を考える・これからの日本」という題材に際し、この三人の現在進行形を含めた歴史を振り返ると共に、私なりにこれからの日本のあるべき姿を考えたいと思う。

私の第二の故郷、姫路。白鷺城と呼ばれる国宝姫路城に程近いその故郷は、私の幼稚園から小学校までの10年間を過ごした思い出の地だ。播州播磨と言え最近では大河ドラマの黒田官兵衛で有名だが、人は優しくおおらかで、豊かな田園地域が続くその緑豊かな光景は幼少期の私を育ててくれた大切な故郷だ。

姫路は私の祖母の里であり、同時に私の曾祖父が一生を過ごした地である。先祖代々私の父方はその地で暮らしを刻んできた。その中でも私の曾祖父、生まれは西暦1900年、生きていれば現在114歳の私の「ひいおじいちゃん」は兼業農家ながら平日は姫路の銀行の支店長だったと最近親から聞く機会があった。

第二次世界大戦の終戦後、日本が必死に成長を模索していたまさにその時、曾祖父は姫路の現在はすっかり名前が変わってしまったある銀行に勤務していたそうだ。先日、父がインターネットで名前を検索すると曾祖父の名前が出てきた。内容は姫路での銀行の重要性や必要性を、姫路の銀行団の代表として議会のような場で参考人として答弁をしている様子だった。いわゆる議会の議事録の開示である。実はその答弁の内容はとても専門的で私にはよく理解できなかったのだが、何故か^{なぜ}必死さのような、なんとしても地域の発展や、自らの利益ではなく共に地域で暮らす人々のために、鋼鉄のような強い意志を持って答弁している事実のみは、私は感じとることができた。会ったことのない曾祖父

がそこにいた。

当時の銀行の果たした役割は文字通り国の発展のために、民間から集めた預金を企業に貸し出し、経済全体を回していく重要な役割を担っていたとのことだが、今と比べるとインターネットもなく、あらゆる社会情報インフラが未整備のその時代には、現在よりもより人間対人間の折衝要素が銀行業務には求められていたと親から聞いた。いわゆる「この人間に資金を融資できるか」といった判断、つまり経営能力や人間本来の信用力を見極める力を日々鍛える事がとても重要だったそうだ。曾祖父^{いっわ}曰く、最も大事な事は、一つ一つの融資が本当にこの国の未来のためになるか否かという点であり、この事を常に仕事の中心に置くことが大事だと。仕事の気概、プロ意識、表現は様々だろうが、どの仕事にも^{つな}繋がるエッセンスがここにある気がする。

戦後の経済の基礎を国民総出でつくり直していく過程で曾祖父は金融業務で世に貢献した。写真のみで会ったことのない曾祖父だが、今後姫路に帰る際は曾祖父が勤めた銀行があった場所に行ってみたい。そして現在の姫路やこの国の発展した状況をその仕事と繋げて想いをはせてみたい。

変わって私の祖父は当時まだ普及の途上であった生命保険会社を勤め上げた人物だ。生命保険普及率がまだ全世帯の半分以下の新人時代から95パーセントを超えた定年時まで、祖父は日本の生命保険業界の発展を正に体現した人物だ。大よそ人間はいつ命が尽きるのかを知ることは不可能だ。その時がいつ来るかわからないからこそ、また人生は有限であるが故に毎日が尊い。祖父の勤務した保険業界は、事故や病気等で一家の大黒柱を失った家族に対し、その後の経済的な危機をできる限り減じる仕組みを世に提供し続けた。あまりにも一般的過ぎて、今ではそれこそ当たり前のように、ネットでも加入できるその保険という仕組みだが、その普及した要因は、祖父を含めた現在80歳を超える業界の先人達が地道に世にその存在意義を問いかげながら普及に尽力していった結果でもあるのだ。

高度経済成長をそのまま経験した祖父だが、その生活自体はいわゆる「モーレツ」そのものだったようだ。土日仕事は当たり前。毎日6時から晩の12時を過ぎるまで仕事漬け。父を含む三人の子供はすべて祖母に任せ、120パーセント仕事のみで生きた人間だった。運動会の写真にはほとんど祖父の姿はなく、



いつも祖母と写る父の姿がある。しかし世の中皆似たようなものだったのだろう。敢えて言えば、当時まだ真新しかった保険という仕組みに圧倒的な世の中の需要があり、従って仕事にかかる時間と成果が見事に比例した時代だということもその要因だろう。結果的に祖父は保険という業界で経済に関わり、多くの世帯の安心に貢献することで職業人を全うした。戦後経済の基礎創りに貢献した曾祖父と比べると、祖父はその基礎の上に生きる生身の人間の経済的ケアの部門を職業として担ったと言える。銀行と保険、同じ金融だが生と死とに役割を分けることもできる両者。今後も両者は世の中に無くてはならない仕組みとして存在し続ける。

祖父は60歳手前で病を患い、その後は現在まで祖母と二人でのんびり暮らしている。正月に同じく保険業界にいる父と話す時など、時折当時の祖父の武勇伝が聞こえてくる。笑顔を交え、ゆっくりと噛みしめながら話すその表情は、時折50代のようにもあり、思い出や記憶というものは時を超えてこちらの心にも染みしてくる。

三人の中で当然ながら最も身近な存在の私の父も現在保険業界にいる。詳しく自身のことを話さない父だが、折に触れて何やら資料を作成したり、パソコンでセミナー等の準備をしている。たまに内容を覗き見すると、少子高齢化・インフレ・資源問題・年金問題・為替などの文言が並んでいる。父曰く、これは今後の日本が遭遇するであろう諸問題なのだそうだ。例えばこの少子高齢化という問題一つをとっても、今の出生状況が仮に変わらないとすると、年々総人口が減り続け、連動して労働人口も比例して減ることになる。その結果日本の国内総生産は今世紀半ばには現在の半分ほどになってしまうことも想定されるとのこと。その未来を避けるための打開策は、兎にも角にもまず人口を増やすことが必須で、出生率を今の倍近くに上げるか、もしそれができないのなら、別途近隣国から大規模移民を受け入れるか等の策を施さないと、社会生活や実体経済自体がもたない。そのような懸案がこの国にはあるとのこと。年金問題しかり・工場の海外移転などの産業の空洞化問題しかり、それは私の未来の子供や子孫にも関係する問題であり、父の取り組む資料の中にはそのようなこの国の未来の危機の文言が並ぶ。

今後日本はどのような発展を遂げていくのだろうか。曾祖父から始まり祖父



を経て父に経済のフィールドは移っている。三代に渡り金融に携わって大よそ百年、歴史はめまぐるしく変わった。この国の良き未来を基本軸に据えて仕事に従事した曾祖父、発展の途上で個人や企業の経済活動がストップしないように生身の個に向き合った祖父、そして先人の努力の結果成熟経済社会になり得たこの国の、今抱える問題に向き合って知恵を出そうとしている父。三者三様だが皆ひたむきに経済活動の中で自らの力を発揮すべく日々を生き、そして今を生きている。

私も今後社会人となり、経済活動を行う時が来る。どのような仕事に就くにせよ、何らかの価値を生み出さなくては存在意義がない。社会も今後緩やかにかつ劇的に変わっていくのだろう。そして世界の中で日本の果たすべき役割や責任は今まで以上に大きいものとなるだろう。戦後急速な経済発展を経て現在の成熟社会があり、一方その結果生じた種々の懸案が私達の目の前に山積み^いなっている。この国を今後担っていくだろう私達は、社会全体の問題として否が応でもそれらの問題に立ち向かわなければならない。それは運命的ともいえる世代の巡りだ。またこれからの金融人のあるべき姿とはどのようなものなのか、正直高校2年の私は明確に定義することもできない。今後経済を構成する企業群がどのようなものになるか、また人間はどのようにしてそれに関わっていくのだろうか。今後折に触れて考える機会や話し合う機会を持ちたいと思う。ただ一つ淡々と思う。先人の知恵と勇気を追い風に、私もこの国の良き未来を創ることに貢献したい。四世代目の金融人になるかは正直分からない。しかし、もしなるとしたら、きっと彼ら百年の想いを大切にしたい。本人達は気づかずとも、受け継がれてきたメッセージを大切にしたい。

